ばらの花とけもの　　オーストリア

昔むかし、金持ちの商人がいて、娘が三人ありました。あるとき、商人は、人にだまされて財産をほとんどなくしてしまいました。そこで、妻や娘を連れて、たったひとつ残っていた、田舎の小さな家に引っ越しました。

田舎の家では、上のふたりの娘は遊んで暮らしましたが、末の娘は、家の仕事を手伝って、牛の世話や畑や木の世話をして働きました。姉さんたちは、妹をばかにして笑いました。

ある日、商人が、財産を取りもどすために、町に行くことになりました。商人は娘たちに、おみやげには何がほしいかたずねました。

「きれいな服がいいわ」

「わたしも、きれいな服よ」

と、姉さんたちはいいました。末の娘は、

「ばらの花を三つ、持って帰って来て」と答えました。姉さんたちは、末の娘を笑いました。

商人は出かけて行きました。どんどん進んでいくと、いきなり馬が立ち止まって動かなくなりました。おだててもおこっても、馬はてこでも動きません。もう日が暮れてきたので、商人は辺りをさがして美しいお城を見つけました。何とか馬を引っ張って行って、お城の馬屋に入れました。

商人は、お城の中に入って行きました。どの部屋も見たことがないほど美しいのですが、しずまりかえっていて、人っ子ひとりいませんでした。食堂に入って行くと、テーブルに食事のしたくができていました。商人は、お腹がぺこぺこだったので、大よろこびでたっぷり食べました。食事がすむと、またろうかを歩いて行きました。すると、きれいな寝室にりっぱなベッドが用意されていました。商人は疲れきっていたので、ベッドにたおれこんで、すぐにぐっすり眠ってしまいました。

商人は、ゆめを見ました。それは、ベッドのわきに長持ちが置いてあって、その中に、だまされて取られたお金がぜんぶ入っているというゆめでした。

あくる日、商人が目を覚ますと、食堂に朝ご飯のしたくができていました。そこで、朝ご飯をすませて、馬小屋に行き、馬に飼い葉や水をやって、馬に乗って帰ろうとしました。すると、庭に、みごとなばらの木があって、すばらしく美しいばらの花が三つさいていました。商人は末の娘のことを思い出して、そのばらをつみました。そのとき、お城の中から、けもののほえるおそろしい声が聞こえました。

商人がおどろいていると、ズシンズシンと地面をゆるがして、やって来る者がありました。それは、馬のように大きくてぶたのような頭をしていました。

「ずうずうしくかってに泊まりこんだあげく、ばらをぬすむとは何事だ。そのばらは、城じゅうで一番値打ちがあるのだ」

けものはそういって、大きな口をかっと開けて、商人を飲みこもうとしました。商人は、ひざまずいて、

「許してください。わたしは殺されてもかまいませんが、三日間だけ、家に帰らせてくだ

さい。妻や娘たちの顔を見たら、必ずもどって来ますから」と、一生懸命たのみました。
すると、けものは、
「必ずもどって来るというのなら、帰らせてやろう」といいました。商人は、
「もうひとつお願いがあります。昨夜、ベッドのわきの長持ちが、ぬすまれたお金でいっぱいになっているゆめを見ました。そのゆめがほんとうなら、お金を返してほしいのです」といいました。
「わかった。おまえがうちに帰ったら、その長持ちが置いてあるだろう」
商人は、家に向かって馬を走らせました。帰り着くと、ちゃんと長持ちが置いてありました。商人は、娘たちに、お城に住むけものの話をしました。
「わしはこれからすぐにもどって、けものに食べられなくてはならない。勝手にばらの花をつんだせいなのだ」
末の娘は、
「だめよ、おとうさん。ばらがほしいと頼んだのはわたしなんだから。わたしがけものの所に行きます」といいました。商人は、強く引きとめましたが、娘はさっさと馬に乗って出かけました。
お城に着くと、娘は中に入って行きました。人っ子ひとりいませんでした。ある部屋の前まで来ると、ドアの上に金文字で、
われらの新しいお妃さまの部屋
と書いてありました。テーブルに、すばらしい食事のしたくができていたので、娘は入って行って食べたり飲んだりしました。食事がすむと、娘はまた奥へ入って行きました。すると、
われらの新しいお妃さまの寝室
と、ドアの上に金文字で書いてある部屋がありました。美しくりっぱなベッドが用意されています。娘は、横になって、ぐっすり眠りました。
あくる朝、娘は目を覚まして、辺りのすばらしい様子に目を見張りました。そのとき、とつぜん、けもののほえる声がして、ズシンズシンという音が近付いてきたかと思うと、けものが部屋に飛びこんで来ました。娘は急いで、
「父に代わって、わたしがやって来ました。覚悟はできています。わたしを食べてください」といいました。けものは、
「今日は、まだだ」といって、またズシンズシンと出て行きました。
娘は、お城じゅうを見て回りました。ある部屋では、本棚にきれいな本がたくさんならんでいました。見ると、どの表紙にも金文字で、
われらの新しいお妃さまの本
と書いてありました。娘は、あきるまで本を読みました。お腹がすけば、食堂にテーブルが整えられてあり、好きなものを好きなだけ食べたり飲んだりできました。食事がすむとけものがやって来て、娘の側にすわっておしゃべりをしました。けものは、いつも、
「ぼくにキスしてくれないか」といいました。娘がことわると、けものはがっかりして部屋を出て行きました。
こんなふうにして、九日間が過ぎました。

十日目の朝、娘が食卓につくと、お皿の上に金の指輪がのっていました。指輪は娘の指にぴったりでした。けものがやって来たとき、娘は、
「この指輪をはめていてもいいんですか」とききました。けものは、
「いいとも。それは君の物だ。君の一番の願いをかなえてくれる指輪なんだ」といいました。娘が、
「それでは、うちの人たちがどうしているか見せてください」というと、けものはいいました。
「夜、寝るときに指輪をはずして、枕元に置くんだ。でも、朝になったらまたはめるのを、わすれないでほしい。わすれたら、ろくなことにならないから」
その晩、娘は、指輪をはずして、枕元に置いて寝ました。すると、娘は家の様子をみんな見ることができました。姉さんたちは、結婚していました。親たちは、末の娘を失って嘆き悲しみ、すっかり年老いていました。
朝になると、娘は、指輪をはめました。そして、けものにいいました。
「もうひとつ願いをかなえてください。家に帰って、わたしが元気で暮らしていることを、親たちに伝えたいのです」
「じゃあ、夜、寝るときに指輪をはずしたら、枕元に置かないで、しっかり持って寝るんだ。そうすれば、君は家に帰ることができるだろう。でも、きっかり一時間たったら、また指輪をはめて、ぼくの所に帰って来ると、ちかっておくれ」
「わかったわ。ちかうわ」
その晩、娘は、指輪を持って寝ました。たちまち、娘は、家に帰っていました。親たちは、娘が元気で、お城で幸せに暮らしているのを知って、よろこびました。
あっというまに一時間がたちました。娘は指輪のことなど、思い出しもしませんでした。しばらくして思い出しましたが、
「どうしてあんなけものと一生すごさないといけないのかしら」と考えました。
けれども、何日かたつうちに、ちかいをやぶったことが気になりだし、けもののことがこいしくなって来ました。娘は、指輪をはめました。
たちまち、娘はお城にもどっていました。ところが、けもののすがたはどこにもありません。娘は、呼んだりさけんだりして部屋から部屋へとお城じゅうを走り回りました。けれども、けもののかげも形もありませんでした。娘は庭に出てみました。すると、そこに、けものがたおれていました。娘はかけよって、キスをしました。たちまち、けもののすがたは消えて、目の前に美しい王子さまが立っていました。
王子さまは、魔女ののろいによって、けものに変えられ、こんなみにくい化け物にキスをする勇気のある娘だけが、のろいを解くことができるのでした。
ふたりは、結婚して、いつまでも仲良く幸せに暮らしました。
この話はほんとうなんですよ。もし死んでいなければ、ふたりは、今でも生きているでしょう。

原話：『世界の民話28オーストリア』飯豊道男訳／ぎょうせい
再話：村上郁